

患者から趣味人として

医療法人社団永生会 永生病院
リハビリテーション部 ○清水竜太 (OT)

【はじめに】

今回、回復期リハ病棟に入院中の A 氏に作業に関する自己評価 (OSA) を実施したところ、A 氏と目標を共有することができた。この後に OT にて徒手介介入と A 氏にとって意味のある作業を実施した結果、遂行機能の回復から趣味である旅行をすることにまで至ることができたので報告する。

【事例紹介】

A 氏は 60 代後半の女性。X 年 1 月下旬に脳出血 (右被殻～視床) を発症し、左片麻痺と重度の感覚障害を呈した。屋内歩行・ADL の自立を目的に 2 月下旬に当院回復期リハ病棟に転院した。A 氏は元知的障害施設の施設長で社交的な方であった。退職後は旅行や山歩きを趣味とし、夫と二人暮らしをしていた。夫は退院後の介護に積極的であったが、仕事のため出張が多かった。

【OT 評価 (入院時)】

BRS は上肢 4・手指 4・下肢 3、感覚障害は重度鈍麻で麻痺側管理が不十分であった。左上肢機能は STEF6/100 点であった。基本動作は立ち上がり・立位・移乗が軽介助で、移動は車いすで自立であった。ADL は食事・整容が自立 (左上肢は不参加)、更衣・排泄・入浴は中等度介助であった。信頼関係ができてきた入院 1 ヶ月後に OSA を実施した結果、A 氏は排泄・歩行の自立と趣味である旅行や山歩きをすることを目標にしていた。

【OT 介入の基本方針】

屋内歩行・ADL の自立を第一目標とし、退院後に外出することまでを視野に入れて徒手介介入を実施した。

【OT 経過】

3 月上旬より、排泄動作への介入では、非麻痺側優位の立位に対し、立ち上がりから前方への重心移動に伴う支持基底面の変化を誘導し、左下肢の安定性の向上を促した。また、右上肢で下衣操作ができるように、リーチ動作に伴う体幹・下肢の協調運動を促した。その結果、4 月下旬に排泄が自立した。6 月上旬には、家屋調査と退院後の外出を見据えて、車の乗り降りを実施した。OT が提案した踏み台を使用して車の乗り降りのできた経験を通して、A 氏は「旅行にも行けそう」と趣味活動の実現が具体的となった。住宅改修後に外泊を促すと、夫は踏み台を自作し、A 氏は馴染みの飲食店に行き、出入口やトイレを確認していた。

【結果 (8 月下旬)】

屋内歩行は SHB を使用して自立、左上肢機能は STEF54/100 点に向上し、ADL は入浴のみ見守り、その他は自立となった。退院後の 10 月上旬には、夫の協力もあり車で旅行に行けたという報告を受けた。

【考察】

今回、A 氏から現在の生活と退院後を見据えた目標を共有することができた。目標に向かった徒手介介入が遂行能力の向上の要因となった。また、A 氏の意志と夫の協力もあり、趣味である旅行をすることにまで至ることができたと考える。

A 氏に対する介入を通して、回復期リハ病棟では、身体機能の回復とその人にとって意味のある作業の双方に介入していくことが重要であると考えられる。